
花香と赤髪の王

真咲静夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花香と赤髪の王

【コード】

N0683M

【作者名】

真咲静夜

【あらすじ】

バイト中に異世界に飛ばされた花香と追われている赤髪の男との旅が始まる。

こちらの更新は月1ぐらいに遅いです。

1 花香とケーキ（前書き）

主人公飛ばされる。

1・花香とケーキ

小林花香は大学から3年勤めているバイト先に向かう途中だった。討論が好きなゼミの教授に捕まり、道州制導入における国の役割を突きあい、おかげで、バイトに遅刻しそうだ。一応、店長には先に連絡を入れたのだが、遅刻はしたくない花香は駅から必死に走っていた。

「花香ちゃん。おはよう。意外に早かったね。」

もっと遅れるかと思った。

優しいな風貌の店長に頭を下げる。

「すみませんでした。」

「まだ混む時間じゃないから、大丈夫だよ。」

申し訳なさそうに身支度しに、事務所に向かい、身だしなみを整えると、店へと向かう。

「今週のケーキはレアチーズと苺のムースの周りを苺のジュレで覆った《フラワーベリーズ》ね。」

「あっこれって」

「そうそう。花香ちゃん提案のやつだよ。今日は一個休憩に味見していいから。」

「ありがとうございます。」

ショートケーキの中に入っているケーキ5種類あり、ショートケーキ、チョコレートケーキ、チーズケーキ、シフォンケーキ、そして今週のケーキであるフラワーベリーズ。

《カフェ7》は花香が通う大学の駅の隣駅の商店街の中心にあって、地域の中でも追随を許さない人気店。

店長の榊秀也は優しいイケメンで地域の奥様方のハートをゲットしている。

カフェの従業員、バイトもある程度の顔で雇ったのではないかと云う程に整った顔をした者が多いことでも有名であった。

「高梨が戻ってきたから、花香ちゃん、休憩に入って」

「はい。」

2時からのバイトも4時間が過ぎた辺りで休憩に入った。用意されていたケーキを食べようといそいそと事務所に行く。

「お疲れ様です。」

先に事務所で休憩していたバイトの秋澤密樹に挨拶して入る。

「花香ちゃん、これ美味しいよ。」

今週のケーキはバイトや従業員がデザインする事になっている。それを店長の榊とパティシエの遊佐由香里が形にして出していた。

秋澤は良くデザインを採用されるバイトの1人で花香と同じ大学に通っていて、花香とも親しく、休憩時間が同じ時には良く話していた。

「密樹君、ホント？早く食べ。」

（来て）

「密樹君：今、何か言いました？」

「いや、別に…」

花香の耳元で誰かが話してきた気がしたが、今、花香の周りには人間は秋澤だけである。

花香はとりあえず、聞いてみたが、秋澤は首を横に振った。

「そっか、気のせいかな。じゃあいただきます。」

気のせい。

そう思うことにして、花香は席につくと、フラワーベリーズにフォークを突き刺し口にした。

「おい…」

（私の代理人になる資格を持つアナタを召喚させて…）

「へ？」

美味しいと言おうとした花香が突然、驚いた顔をしたので、秋澤が声をかけた時だった。

「花香ちゃん、どう………えつつわあああああ。」

目の前に座っていた花香が消えたことで、秋澤はパニックに陥り、叫んだ。

「どうしたんだ？」

「秋澤君？」

「何があったの？」

榊、遊佐、そして、もう1人の従業員、高梨元が事務所に入ってくる。

「は……は……花香ちゃんが………消えた。」

秋澤の席の前には一口食べられたケーキがポツリとあった。

カフェ7の事務所は騒然となり、警察が呼ばれた。

捜索が行われたが、花香が戻ってくることはなかった。

摩訶不思議の怪奇事件として、しばらく世間を賑わせただけだった。

1 花香とケーキ（後書き）

目の前で人が消えるとか勘弁してほしいですね。

2・禁足の湖の畔（前書き）

ヒーロー登場

2・禁足の湖畔

野獣の音が響く森の中で、1人の男が大きく聳える樹に寄りかかり、身体を休めていた。

森の中での夜営では野獣を寄せ付けなかったための火は重要だったが、火を起こすこともなく、男は身体を丸め、大剣を片時も離さず、辺りの気配を伺う。

男が夜営しているのは、森の奥にある湖の湖畔。

そこは地元民から禁忌の湖とされ、年に一回祭事に贅が流されるだけに使われ、他に人が近寄る場所ではなかった。

追われる身の上の男としては、人の気配がしないこの場所は、潜むのに適しているとは言えないものの、少しは身体を休めれる場所ではあった。

「ふう……」

男は水面を眺めて嘆息した。

「面倒なことになったものだ。」

上を見上げれば、真っ暗でも鬱蒼と茂る木々が広がる。

「……」

その時だった。

男は森の獣達の気配がなくなったことに気付いた。

大剣の柄に手を掛け、いつでも抜ける態勢を作って、気配を伺う。

「……」

五感を駆使し、辺りを探っていると、目の前に人が落ちてきて、湖に派手な音を立てた。

「…」

男は臨戦態勢のまま、そっと湖に近寄った。

「…」

湖をじっと見ると、黒を纏った女が1人、水面に浮いていた。

男は近寄り、女を抱き上げる。

女は眠るように目を閉じていた。

自分が居た木の根本に横たえると、呼吸と脈を確認すると、呼吸も脈も正常で、男は上を見た。

「どこから降ってきたんだ？」

しかし、今までの様に暗闇が渦巻いている。

ぐしょ濡れた女は黒を纏っている。

この世界に黒を纏う者は、誰一人としていない。

黒は全ての色を支配する色。

この世界を作った女神の色だ。

女は髪から服から黒を纏っていた。

「何か起きようとしているのか？」

男は嘆息した。

*

『花香、ごめんなさい。もつ…』

「何が？」

「…」

女がぱちりと目を開くと同時に口を開き、起き上がったのを男は驚いて見ていた。

「…」

「…」

「…」

女は周りを見回した。

自分はバイト先に居たはずなのに、今、目の前に広がるのはキラキラ光る森の中の水面だった。

「…ここはどこ？」

「…ここは禁足の湖の畔だ。」

独り言を呟いたつもりが、後ろから返事が来て、ぎよっとする。

そおつと後ろを振り向けば、深紅の髪の方がこちらをじつと見ていた。

その格好がファンタジーゲームのコスプレのようで、さらに驚く。

「身体：隠さなくていいのか？」

「え？」

男は女の濡れた服を脱がし、自分の外套で包んで、女の身体を温めていた。

女が起き上がったことにより、外套ははだけて、見事なまでに豊かな脹らみが見えた。

脱がせて驚いた。髪やまつ毛、その他に生える毛は黒でそれ以外の肌の色は白く、唇と胸の頂は落ち着いたピンク。

今までに見てきた女にはない配色の女だった。

「目も黒いのか…」

外套を慌て、身体に纏わせた女は、顔を赤らめさせ、身体を震わせていた。

「勝手に脱がせたのは、すまなかった。お前が湖に落ちてきて、ずぶ濡れで意識がなかったから、身体を温める為に脱がした。お前の服は初めて見る意匠だ。お前はなんだ？」

理由と謝罪を淡々と述べ、女に対する不信感を顕にする。

「なんだって何よ。私だって分けわからないのよ。」

分かるはずがない。

女はバイトしていたはずなのに、気が付いたら、森の中で衣服を脱がされていた上に、見ず知らずの男が傍にいたのだ。震え戸惑う女に男は深く息を吐くと、傍に近寄った。女はびくりとしていて、頑なに固まる。

「近寄らないで……」

女は男を睨む。

男は立ち止まり、少し考えて元の場所に戻ると、何かを持ち上げ、女に投げる。

「服だ。来ていた服はまだ濡れているから、俺の着替えて我慢しろ。」

「……」

「……………少し離れてやる。」

そう言うと男はその場を離れて行った。女は服を見て、ため息を吐いた。

「これ、どうやって着たらいいんだろう。」

*

「何となく想像はしていたが……」
男は絶句していた。

確かに女は男から見て、相当に小柄ではあるが、服のだばだば具合を見て、服の締め方を見て、相当にいい加減だった。

「めちゃくちゃだな。」

男は女の前に立つと、服のあわせを直し、結んでいく。

「まあ、こんなものだろう。…お前が何者かは知らんが、1つ忠告しておく。人前では黒を見せるな。髪は勿論、睫毛もだ。ついでに外套についている被り物を目より下まで被せて、誰にも素顔を見せるな。」

いきなりそんなことを言われても、どうしていいか、女は固まっている。

そんな様子を見た男は理由を話す。

「この地に黒を纏う者は居ない。現に俺も赤髪だ。この国に住まう者は赤を身体に持っている。他国には他国の色があり、生まれた国により色が変わるが、黒だけは居ない。黒は神の色。禁色であり、異質過ぎる。その色を纏うお前がうるうるするのは危険なのだ。」

理由を言われても、この先、どうしたら良いのかもわからない。

そんな表情がありありと出ていたのだろう。

男は頭を掻いた。

その時だった。

『赤の…。私の依り代を護って…』

困惑していた女が口を開いていた。

ただし、その瞳は何も写していません、口から出た声はそれ迄話してい

た声とは別人の声音だった。

『黒の…谷に教会に見つ…からぬ用に…連れてきて…』

別人の声音が途中で途切れたとたんに女の身体がぐらりと揺れる。

男は慌て、女の身体を支えた。

意識を失って、力をなくした女をそつと横たえる。

「女神が依り代にするために呼び寄せた女か…」

ならば黒を纏う理由も分かる。

黒は女神の証明。

女神を崇めるこの世界において、絶対的な権威を持つ聖教会に見つからないように聖地へ連れていく。

それを女神自身が頼んでくる。

男は身体を震わせた。

これは世界の根底に関わるとんでもないと言えない事態に関わってしまった。

「このまましばらくは逃亡中か…まずは金を補給しないとヤバイな。」

そろそろ持ち金が心細くなっていたところで、人が増えるとなると、少しばかりまずい。

連れになるのは旅慣れていなさそうな女だった。

「バグルダに行くか…」

バグルダは白を纏う国。

黒の聖教会を排除した国。

そして男の幼なじみが統べる国だった。
男は女に外套を深く被せると、肩に担ぐ。
とりあえずが決まれば、後は行動。
男は目的地に向かって歩きだした。

2・禁足の湖の畔（後書き）

名前がでやしねえ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0683m/>

花香と赤髪の王

2010年10月9日04時24分発行